令和 6 年 5 月 31 日

令和 5 年度研究成果報告書

研究課題：漢検受検者の学習に関する動機づけと方略に関する調査研究

研究者：大塚貞男　京都大学医学部附属病院精神科神経科　特定助教
村井俊哉　京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座精神医学教室　教授

1. 研究の背景

読み書き習得は学業を支える重要な基盤であるが、日本の子どもの 6～7%程度が漢字の習得に困難を抱えていると報告されている（Uno et al., 2009）。そうした子どもへの効果的な教育ストラテジーや支援方法を開発するためには、つまずきの背景を明らかにすることが重要である。そこで我々は、この研究に先立って、日本漢字能力検定（漢検）の受検データベースを解析し、漢字能力が読字、書字、意味理解の 3 側面から成ることを特定した（Otsuka & Murai, 2020, 2024）。そして、その上で、漢字能力の 3 側面の基礎にある認知機能について検討し、それらの習得には部分的に異なる複数の認知機能が関わっていることを明らかにした（Otsuka & Murai, 2021）。その研究では、漢字習得の個人差の 24～43%程度を認知機能によって説明しうることが示された。

しかしながら、認知機能のみによる読み書き習得の説明には限界があり、その他の要因についても検討を進める必要がある。例えば、より広く、学業成績全般については、学習への動機づけや学習方略が関連すると報告されている（Yip, 2021）。学習に関する動機づけや方略は、読み書き習得の個人差とも強く関連していると考えられ、その関係性を検討することは重要であると考えられる。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は、漢検を受検する中高生を対象に調査を実施し、漢検成績と学習動機づけ、および、学習方略との関係性について検討することである。本研究の遂行により漢字習得と学習動機づけ・方略との関係を明らかにし、漢字習得の個人差にどのような動機づけや方略が関わっているかを特定することは、読み書き教育の実践や、漢字習得に困難を抱える子どもの支援に役立つと考えられる。

3. 研究の方法

1) 学習動機づけ・方略質問紙（Motivated Strategies for Leaning Questionnaire: MSLQ）日本語版の作成

中高生の学習に対する動機づけの程度や学習方略の使用について調査するために、

MSLQ（Pintrich et al., 1991, 1993）日本語版を作成した。MSLQ は、欧米で開発されたものであり、中学生から大学生に適用され、信頼性・妥当性が確認されてきている（for reviews, see Bananomi et al., 2018; Duncan & McKeachie, 2005）。MSLQ の原版は 81 項目であるが、本研究では中学・高校生を主たる対象として調査を実施するため、負担に配慮して 41 項目の短縮版（Wang et al., 2022）を採用した。翻訳においては、2 名の研究者が独立して和訳を行い、合議によって日本語版を作成し、その後、第三者（Crimson Interactive Pvt. Ltd., Ulatus）によるバックトランスレーションを実施して正確に和訳されていることを確認した。なお、和訳にあたっては、中学生が容易に理解できるように難しい漢字の使用を避け、平易な文章を心がけた。

2) 漢検を受検した中高生を対象とした調査

研究参加者：漢検を受検した中学・高校生 1006 名（中学生 272 名、高校生 734 名）。学校を会場（準会場）として漢検を実施した 6 つの学校（5 都府県の中学校ないし高等学校）の協力を得て調査を実施した。

手続き：研究参加者は、漢検の①受検申込後、②受検直後、③結果通知後の 3 時点で調査票に回答した。調査票には、MSLQ 日本語版を用い、加えて、過去 1 ヶ月間における 1 日の平均家庭学習時間数（平日、休日）を尋ねた。また、①受検申込後には、漢検受検回数、受検理由、②受検直後には、漢検受検対策学習の有無に関する回答を得た。調査票は、1 校の 3 回目調査の一部が持ち帰りで実施された以外は、教室で一斉に実施された。なお、本調査は、（公財）日本漢字能力検定協会によって運営された。

尺度：MSLQ 日本語版は、41 項目からなる質問紙であり、7 段階で回答を求めた（1 全くあてはまらない～7 よくあてはまる）。MSLQ は、動機づけ尺度（Part A）と学習方略尺度（Part B）によって構成される。前者の動機づけ尺度は、価値要素を測定する内発的目標志向性、外発的目標志向性、課題価値の下位尺度、期待要素を測定する制御信念、学習自己効力感の下位尺度、感情要素を測定するテスト不安の下位尺度からなる。後者の学習方略尺度は、認知・メタ認知方略を測定するリハーサル、精緻化、組織化、批判的思考、メタ認知方略の下位尺度、資源管理方略を測定する勉強環境、ピア学習、援助要請の下位尺度からなる。援助要請（2 項目）以外の下位尺度は、3 項目からなる。各項目の平均値を指標として用いた。

家庭学習の平均時間数は、30 分未満、30 分～1 時間、1～2 時間、2～3 時間、3～4 時間、4～5 時間、5 時間以上の 7 段階で回答を求めた。それぞれ、0、0.5、1、2、3、4、5 時間として集計を行った。

倫理的配慮：学校担当者用の説明文書を用いて学校の代表者から文書で同意を得た上で、生徒用の説明文書を用いて学校の教員から研究の説明を行い、生徒本人から文書で同意を得た。なお、研究説明時に同意撤回書を本人に配布し、本人および保護者による同意撤回の機会を提供した。

4. 研究成果

1) 漢検受検回数

初めて漢検を受検した生徒は半数弱の 45.3%、2 回目の生徒は 23.1%、今回を含めて 3 回以上受検した経験がある生徒は 31.6%であった（$n = 940$）。また、個人受検の経験がある生徒は 14.4%であった（$n = 954$）。

2) 受検理由

漢検の受検を決めた理由について、5 段階（1 あてはまらない～5 あてはまる）で回答を求めたところ、「自分のため」は 3.8 点（$n = 916$）、「人（家族、友人、先輩、塾の先生など）に勧められたから」は 3.0 点（$n = 915$）、「学校から求められたから」は 4.3 点（$n = 916$）であった。学年全員が受検する学校もあり、学校の求めで受検しているという認識は強かったが、それでもただ受動的に受けているわけではなく、同時に「自分のため」という意識をもっていることが示された。

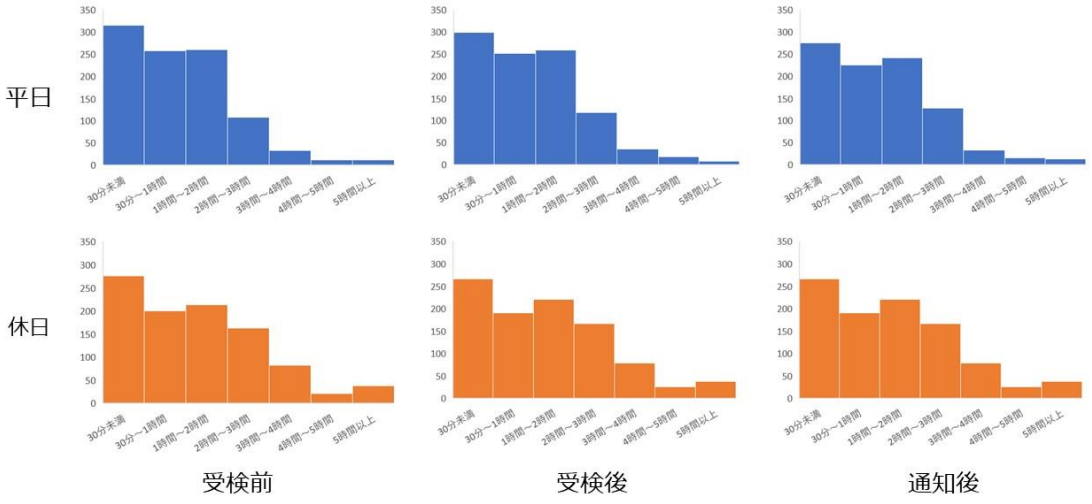
3) 漢検対策自主学習

漢検受検に向けて、授業や宿題の範囲を超えて漢検対策自主学習を行ったと回答した生徒は 29.3%であった。授業や宿題の範囲で漢字学習を行ったと回答した生徒は 59.6%、漢字学習を行わなかったと回答した生徒は 11.1%であった（$n = 985$）。

4) 家庭学習時間

漢検の①受検前、②受検直後、③結果通知後の 3 時点において、過去 1 ヶ月間の平日と休日の平均家庭学習時間数を図 1 に示した。①受検前の平日は 0.8 時間（$n = 996$）、休日は 1.2 時間（$n = 992$）、②受検直後の平日は 0.8 時間（$n = 986$）、休日は 1.2 時間（$n = 986$）、③結果通知後の平日は 0.9 時間（$n = 930$）、休日は 1.3 時間（$n = 929$）であった。3 時点で明らかな違いはみられなかった。

図 1. 受検者の平日・休日における平均家庭学習時間数

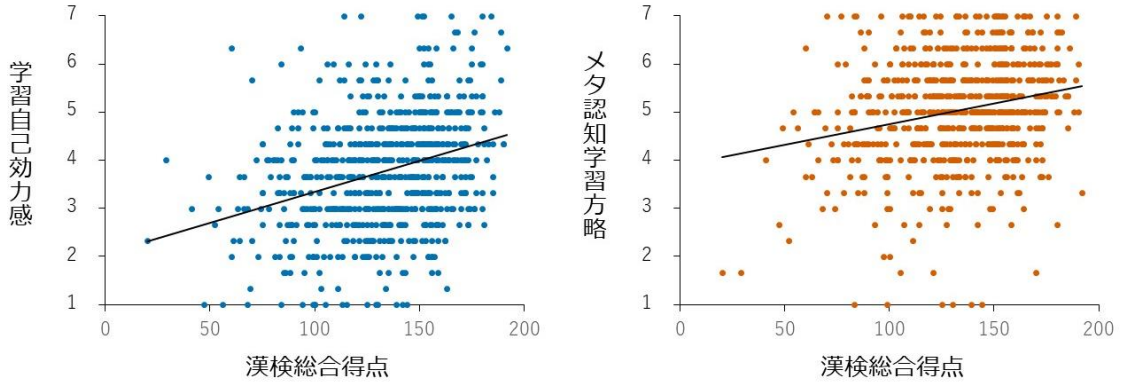


5) 漢字習得度と学習動機づけ・方略との関連性

ピアソンの積率相関分析を用いて、漢検の総合得点と受検直後の学習動機づけおよび学習方略との関連性を横断的に検討した（図 2）。なお、本解析では、最も人数が多かった 3 級受検者のデータを対象とした。その結果、漢検の得点が高い生徒ほど、学習自己効力感が高く（$r = 0.32, p < .001; n = 703$）メタ認知学習方略をよく用いている（$r = 0.23, p < .001; n = 698$）ことが示された。

これらの結果は、読み書き習得の個人差に、学習自己効力感とメタ認知学習方略が関わっていることを示唆している。または、漢字学習が、学習自己効力感の発達や、メタ認知学習方略の習得に寄与している可能性がある。

図 2. 漢検成績と学習動機づけ・方略との相関



5. 今後の展望

本研究では、MSLQ 日本語版を作成して、漢検を受検した中高生を対象とした調査を実施し、本報告書においてその集計結果と、最も人数が多かった 3 級受検者のデータを用いた横断解析を行った。今後は、縦断データを用いた解析を進め、学習動機づけや学習方略と読み書き習得との関係性や、漢字学習や漢検受検が学習動機づけの発達や学習方略の習得に及ぼす影響について検討していく。

引用文献

Bonanomi, A., Olivari, M. G., Mascheroni, E., Gatti, E., & Confalonieri, E. (2018). Using a multidimensional Rasch analysis to evaluate the psychometric properties of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ) among high school students. *Testing, Psychometrics, Methodology in Applied Psychology*, 25, 83–100. https://doi.org/10.4473/TPM25.1.5

Duncan, T. G., & McKeachie, W. J. (2005). The making of the motivated strategies for learning

questionnaire. *Educational Psychologist*, 40(2), 117–128. https://doi.org/10.1207/s15326985ep4002_6

Otsuka, S., & Murai, T. (2020). The multidimensionality of Japanese kanji abilities. *Scientific Reports*, 10, 3039. https://doi.org/10.1038/s41598-020-59852-0

Otsuka, S., & Murai, T. (2021). Cognitive underpinnings of multidimensional Japanese literacy and its impact on higher-level language skills. *Scientific Reports*, 11, 2190. https://doi.org/10.1038/s41598-021-81909-x

Otsuka, S., & Murai, T. (2024). The unique contribution of handwriting accuracy to literacy skills in Japanese adolescents. *Reading and Writing*, 37, 1183–1208. https://doi.org/10.1007/s11145-023-10433-3

Pintrich, P. R., Smith, D. A. F., García, T., & McKeachie, W. J. (1991). *A manual for the use of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ)*. University of Michigan.

Pintrich, P. R., Smith, D. A. F., Garcia, T., & McKeachie, W. J. (1993). Reliability and predictive validity of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ). *Educational and Psychological Measurement*, 53, 801–813. https://doi.org/10.1177/0013164493053003024

Uno, A., Wydell, T. N., Haruhara, N., Keneko, M., & Shinya, N. (2009). Relationship between reading/writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: normal readers versus poor readers (dyslexics). *Reading and Writing*, 22, 755–789. https://doi.org/10.1007/s11145-008-9128-8

Yip, M. C. W. (2019). The linkage among academic performance, learning strategies and self-efficacy of Japanese university students: a mixed-method approach. *Studies in Higher Education*, 46(8), 1565–1577. https://doi.org/10.1080/03075079.2019.1695111

Wang, F., Jiang, C., King, R. B., & Leung, S. O. (2022). Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ): Adaptation, validation, and development of a short form in the Chinese context for mathematics. Psychology in the Schools, 2022, 1–23. https://doi.org/10.1002/pits.22845